

「我が子を小學校に送りて」

子爵令嗣夫人 平 田 靜 子

小學校へ子供を送つての感想をとのお尋ねですが、前に長男を、同じ幼稚園から學習院に、送つた經驗を持つて居ります私は、今度は長男の時のやうに、非常な心配をしないで、次男の正治マサハルを、また同じ幼稚園から學習院に送ることが出来ました。

その爲め、あゝであらうか、斯うであらうかといふやうな、想像をめぐらす必要が尠くて済みました。従つてとり立てゝお話するやうな新発見もございません。又お話する價值のある感想を述べることが出来ません。

次男正治マサハルに就ては、豫ねて幼稚園の諸先生から性質その他に就て、よく承つて居りましたがその事と、正治の入學試験に就て、學習院主任から話された試験の結果と、あまりよく符合して居るの

で、私も非常な安心を以て入學の日を待つばかりでございました。

學校に就ても正治に就ても、何といふ事なと一種の心丈夫と、安堵とを持つことが出来ましたといふことは、諸先生並びに學校に就て、心から感謝いたさねばなりません。

學校へ参りましても、教室が第一わからないで、まごまごしなければならぬ始めての父兄の方を、今度はまことに御氣の毒に感じました。先生を知り、學校を知るといふことは、どうしても必要であると云ふ經驗を、今日つくづく味はつたのでございました。

かねてから幼稚園を経て、小學校に入學した子供と、家庭より直に入學した子供との、比較に就いては、いろいろ考へてをる事ではありますが、

何を云ふても、數日間の感想でありますし、正治の組ではあの子一人が御茶の水出身で、他は大方學習院の幼稚園から來たもの、其他どなたがどうか、不明な爲に、比較研究をすることが出來ないのは遺憾であります。自分の知つて居る若干名に就いて考察すれば幼稚園から參つた者は、先生の御話を伺ふ時の姿勢が、他と比べて宜しい様で、且つ早く御話を理解する様に見受ます、又先生に早く親しみ、活潑に動いて居る様ではありませんが一面から申せば、其爲に、不注意になり勝な、缺點を持つやうに思ひました。

左に正治の入學の初めにかきつけました日記の一節を何かの御參考にもと存じお目にかけませう。

○入學第一日(四月九日) (母……静子記す)

始めて學校に行く日であるから、途中を氣遣ひ私自身付き添つて、お茶の水から甲武電車に乗つて、四谷で降りました。電車内では少しも私に向

つて話をしかけず、只どんな學校か、かねて兄(カッ巴)より「運動場は第一、第二、第三とある、僕は第一運動場で遊ぶのだが、正治は門の側が遊ぶ處だよ」とか、教室はこんな處だとか、學校に就てあらん限りの話を聞かされて居つたので、今、そのよい學校に行く途中、楽しいやら、心配やらで胸の中はさぞ動悸をうつて居つたことであらう。わざと、自分も一口も話さず。四谷に來たので先に降りれば、後から續いて參り、停車場からは二丁程の學習院初等科の門をはいり、一年西組の教室へ參りました。主幹の二宮先生がやさしいお顔で「さあ、どこでも机に腰をおかけなさい」と云はれた。正治は常に人中にあまり出ないのので、いつも引込み勝ちの子なれば、今日もどうかと案じて居つた處、さつさと自分の手より離れて、空いて居る机に落ち着き拂つてランドを下して腰かけた。もう今日からは、自分は學習院の學生である、深く覺悟して居つたものと見え、動

作がはきくとして、昨日迄の正治とは思へぬ様であつた。

いよ／＼始業の鐘が鳴つた。先づ背の順をきまられ、ほんとうに席が決まつた。着席の時の姿勢など教へられた。その着席と云ふ言葉は、無論始めて聞いた言葉なのであらうけれど、先生が手つきでお示しになるので、皆が腰をかける。今度は「氣を付け」と云はれると、机の右に立ち、帽子を右の手に持ち直立する。そのお稽古やらで時間はどう／＼たつてゆく。

ごく／＼眞面目で、正直な正治は、きちんと椅子に腰かけたまゝ、膝に手を載せて長い間のお話を、身動きもせず伺つて居る。その間のお話は、幼稚園とは全然違ひ、ごく簡單明瞭のお言葉で仰るのであるから、多くの子供には解らないのであらう、中には後を向いたり、口をあけたまゝのもある。窓の外を眺めるのもある。その中で獨りきちんとして居るので、さぞ勞れることであらう

と可哀想になつた。

間に二度休息して三時間目に、今度は唱歌、體操の時間であるから出ませうと、先生が仰有ると待ち兼ねて居た一人の子供は、まだ禮もすまぬうちに自分の周圍の子供を煽動して「さあ、出るんだ、出るんだ」と大きな聲をして騒いだので、全體が急に騒かしくなつた。けれども正治はやはりまだ椅子に腰をかけて濟まして居た。やがて先生に制せられて、やつと一同鎮まり唱歌室へと行つた。こゝでも出入の禮を教へられ、それから體操の先生より、體操に就きての心得、覺悟を説かれそれから色々の道具を見せてあげるがらとて、大きな砂場に行つた。こゝで驚いたのは、先生が使つてもよいと云はれたので、いつの間にか棒登りの、かなり上の方へする／＼と登つてゆく子供がある、他の子はあとの方に登らうとして居る。私は「まあ、あの子はよく身輕に登つて行く」と他の父兄の方とお話をして居つた處、その方が「あ

れは正治さんですよ、まあお上手に」と云はれたので、よくくく見ると正治であつた。親から見ると、いつ迄も意氣地なく弱虫のやうに見えて居たけれども中々大膽な、勇氣のある子だと非常に驚いた。肋木ワキボでも、迂り臺ワタでもなか／＼巧妙にする。

先生から「集まれー」の命令が下ると、すぐに走つてくる。こんな風に、參觀して居つても少しも心配なしに、寧ろ非常に嬉しく感じた。歸つてきてからは、流石に勞れたと見え、夕食もそこ／＼にぐつたりと寝てしまつた。翌日二三の方に伺つた所、やはりどのお子も疲勞を覺えられたとの事であつた。

○入學第二日(四月十日) (父……松堂記す)

少し遅れて行つたので、二時間目の體操から觀た。チヨコナンと椅子に腰かけた正治を漸くに見出すことが出來た。絶えず先生の顔を注視して居るのには、微笑まれたのであつたが、お茶の水仲

間では、そんなに小さくもないとばかり思つて居つたのに、流石華族仲間のノッポの仲間入をしては後から三分の一と云ふ小さくには先づ驚かされた。

次の唱歌では、ア、ア、ア、ア、と調子の練習であつたが、先生の眞似をして相圖の手まで揚げて唱ひ出した子が澤山あつた、正治は先づ立派であつた。正治の聲が少し小さいかと思つた。左の手を平らにさし出して、右手をその手に重ね、拍子をうちながら、ピアノに合はせると先生が云はれたが、いつか右手を下にしたり、兩手を眞直にして叩いて居る子供もかなり澤山あつた。正治はよく守れた。お退けとなつたが、ランドの草紐が背にかゝらないで苦しんで居る。とう／＼先生が懸けて下さつた。

家に歸つてから、「なせお父様の教へた通りにランドをかけない」と聞くと、「先生が斯う懸けると皆にお教へになつた」と云ふので、「それは斯う懸

けるとよく懸かるからと教へて下さつたのだが、

お前のやうな腕の短かいものは、お父様の教へた様にしてお懸けなさい」と教へてやつた。その翌日は「お父様の教へた様にして一番先に出來た」と喜んで居た。是非とも先生の通りになければならぬと云ふ心はよい、併しかね、幼稚園の先生も心配して下さつたこの子の我を通して行く、と云ふ心、それがこんな事の注意不注意から將來の原因をなすのではあるまいか。今の處、學校は正治にとつて面白い處と思つて居るらしい。すべてに就て一生懸命である。自分自身はする事なす事心配で堪らないらしく思はれる。それを思ふと小さな机の前から二列目の右端にキチンとして動かない次男正治を見出した瞬間、よくあゝして座つて居てくれるかと思ふと、いぢらしさ可愛さ今にも馳け寄つて頭を撫で、やりたいやうな氣がする。この子の修了半ばにして幼稚園を去られた○先生にこのやうな處をお目につけたら、どんな

にか喜ばれることであらう。

正治は今迄とても、嬉しい事があつても餘程の場合でない顔に現はさない子供であつたが、學習院に行つてからもやはりそうである。洋服屋が假縫を仕立て、着せても、たいニヤリ／＼として居る、小さな學習院生徒の新米として濟まして居た。いよ／＼入學許可が來てから、自分は兄に隨いて學習院（今迄は兄の學校姿が羨ましかつた、ランドを背負ふと云ふ事が殊にしたくてならなかつた。今迄幼稚園の仲間が三角帽を被つて居るので、好んで三角帽を被つて居たが、お前は附屬の方が好きだから附屬に入れやうか、それとも學習院かと聞くと、學習院がよいと云ふて居た）に行くのだと云ふ氣になつた。つひ昨日迄は厭だ／＼と云つて逃げて居た正治が、一心に繪をかく、手工の色紙を張り出した。

學校が始まつてから我々に話をする時は、そんな大きな聲もしないのであるが、算術の答などは

大きな聲を出すので、勢なからすこちらが面喰らつた。(尤も大きな聲で、お答をしろとは教へて置いた) 學校から歸つて來て、あれはよかつたと褒めてやると、只ニヤリ／＼と笑つて居る、あそこは斯うしなければならぬと教へてやると、翌日は必らずその通りする。今では多少の安心を以て正治の一舉一動に興味の眼を投げ居る様になつた。

(談話筆記……文責記者)

○日本幼稚園協會總會

別項豫告の如く本會は來る五月十七日(第三土曜日)午後一時半より東京女子高等師範學校講堂に於て總會を開きます

尙其節最近歸朝されし藤井教授の歐米視察談及び東京帝國大學文科大學に於て美術史を教授せらるゝ瀧博士の藝術上の御講演も有之筈に付多數友人お誘ひ合せ御來聽を歓迎致します

田中ふさ子女史送別會

東京市幼稚園關係有志發起のもとに、女史の送別會は四月十二日午後一時より小石川植物園に於て開かれました餘興講談に次いで、笹野豐美氏の開會の辭があり續いて、土川、多田、山下、千葉、倉橋、諸氏の演説があり、田中女史の答辭終つて、一同會食を共に致しました。

この日、會するもの、百二三十名。女史が我が保育界に致せる功勞の多大なる事は、右諸氏の演説の中にもあきらかでありましたが、尙、この宴のかくまで盛會であつた事によつて一層女史の徳をしのぶ事が出来ると思ひます。

折柄の春雨に、庭の新緑は煙りて一際景色をそへました。名残りなとめて會を閉ぢましたのは午後六時近くでした。